メッセージアウトライン
ヨハネ10：32～42「神か人か」

イエスは自分を石打ちにして殺そうとするユダヤ人たちに対して、「父から出た…どのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか」と問いかけられた。(32)イエスはここでも父なる神との一体性を示しておられる。これに対して、ユダヤ人たちは、「良いわざのためではなく、冒涜のためだ」と言う。(33)
彼らは、その心のかたくなさのゆえに、イエスがなされた良きわざにもかかわらず、イエスが神であるということを認めることができないのである。そこでイエスは律法を引用された。(34)この場合の律法とは旧約聖書全体を指す。それは詩篇82:6のことばであった。そこで言われている「神々」とは唯一のまことの神のことではなく、神のことばを受けて人々を治めることを委ねられた王や権力者、さばき人たちのことを言う。

そのように神のことばを受けた人々を神あるいは神々と詩篇で呼んでいるのであれば、この聖書のことばは廃棄されるものではないから、「わたしは神の子である」と本当の意味で言ったからといって、どうして「神を冒涜している」と言うのかとイエスは言われる。(35,36)ここで言われている「聖」とは一般の状態から区別されて神のために用いられるものとなることを意味する。→出ｴｼﾞﾌﾟﾄ30:22~29
決して変わることのない神のことばの中で神から委ねられて人々を治め、裁く王や権力者たちが神々と呼ばれているならば、イエスは本当の意味で神の子であり、神の救いの計画の実現のために用いられ、この世に遣わされたお方であるので、「神を冒涜している」というのは当たらないのである。しかし、ユダヤ人たちはそのことが理解できない。あくまでイエスを「ただの人間」という固定観念から見ようとしているのである。

もしイエスが父のみわざを行っていないのならば彼を信じる必要はない。(37)しかし、事実はそうではない。イエスはそのわざを行っておられるのである。イエスは、「たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい」と言われる。(38)そのわざを見れば、イエスが父なる神から遣わされてきたお方であり、父なる神がイエスにおりイエスが父におられるという一体性を信じ、悟り、知ることができるのである。しかし、心かたくななユダヤ人たちは、あくまでイエスを信じようとせず、捕らえようとした。(39)しかし、イエスは彼らの手から逃れられた。イエスの「時」はまだ来ていないのである。

イエスはエルサレムを離れ、ヨルダン川の東のあのバプテスマのヨハネが最初にバプテスマ(洗礼)を人々に授けていた場所(ﾍﾞﾀﾆﾔ)にしばらく滞在された。(40)イエスがそこにおられることを聞いて、やはり多くの人々がイエスのところへやって来た。イエスはそこでも福音を伝え、多くの人々をいやされただろう。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行なわなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。(41)そして、その地方で多くの人々がイエスを信じたのである。(42)　心かたくななユダヤ人たちは、イエスを単なる人と見て、そのしておられる良きわざのことは全く無視してイエスを抹殺しようとした。しかし先入観のない心でイエスのしておられるみわざを見るならば、確かにこのお方は神のもとから来られたお方だと信じることができるのである。